

11 お玉が池種痘所の設立に参加した

添田玄春

深瀬泰 旦

安政五年お玉が池種痘所の設立に参加した八三名の医師の一人に、神田和泉橋通りにすむ添田玄春がいる。添田氏は代々松平長門守長八郎(四五〇石)の家臣で、のちに幕府御番医師に昇進し、『寛政重修諸家譜』にもゆる由緒ある医家であるが、これについての報告はすくない。かつて藤浪剛一はその論文で、「添田家は漢医方の家柄である」とのべているが、はたしてそのように断定してもよいものであろうか。順天堂大学山崎文庫が所蔵する『添田玄春日記』や『法蘭院中日記』などによって、添田玄春について新知見をえたのでここに報告する。

添田玄春は文政九年(一八二六)に生まれた。嘉永元年(一八四八)八月四日に家督をつぎ、安政五年(一八五八)三三歳のおりには、お玉が池種痘所の開設にさいして江

戸にすむ蘭方医たちとともにその設立資金を拠出してゐる。文久三年(一八六三)に長崎に留学してオランダ医学をまなび、明治元年(一八六八)八月一日に種痘館鑑定診察掛に任ぜられており、大病院の職員録には種痘館診察鑑定役としてその名が記載されており、月給は五両である。明治二年(一八六九)六月二十七日に父と同じ四四歳で死亡した。法名は礼讓院法普自然得道居士と号した。

玄春の父玄成は溝口伊勢守直道の女をむかえて玄春をもうけた。玄成は嘉永元年五月一六日に四四歳で没している。文化二年(一八〇五)の生まれである。玄成については、山崎文庫蔵するところの嘉永三年の屋敷絵図から医学館の西側にすんでいたこと以外は、現在のところほとんど知るところがない。

玄成の子であり、玄春の祖父は道周である。『寛政重修諸家譜』によると添田道周は

直次郎。就寿(なりとし)。実は宇野氏の男。母は某氏。

就勝が養子となりて其女を妻とす。寛政七年十二月二十七日遺跡を継。時に三十一歳廩米三百俵。妻は就勝が女。

とある。道周は文政六年(一八二三)七月一日に神田和泉橋の自邸で没した。六〇歳であった。

島田筑波によると添田氏の先祖は藤原氏で、檜崎加賀守豊氏にはじまり、のちに毛利氏の麾下となり一四世の孫の豊寿の代に京都の添田某に医学をまなんだという。

この豊寿の曾孫にあたるのが道周である。

文化十一年(一八一四)二月に道周は「阿蘭陀人対談願」を幕府に提出した。オランダ人の逗留中面談は一度にかぎること、弟子たちを引き連れてゆくことはまかりならぬという条件がついてはいたが、この願いはゆるさされた。しかし商館付医師ヤン・フレデリック・フェイルケは病気のため対談がかなわず、商館長ヘンドリック・ドーフが代わって対面した。医師との対談でなければその成果は期待できないので、道周はおそらくかなりがっかりしたにちがいない。しかし折角の機会なので三月六日に長崎屋におもむいてカピタンと面会对談した。その内容については不明である。

玄春には蘭学にたいする理解と興味をもった血液が流れていた。またかれ自身も大槻俊斎や伊東玄朴などとの

交際があり、早くからオランダ医学にたいしては目が開かれていたといえよう。このような状況を考えると、かれがお玉が池種痘所の発起にあたって八三名の蘭方医に名を連ねるに値する人物であったといえよう。

(順天堂大学医学部医史学研究室)